

聖書：ローマ 13：1～7

説教題：上に立つ権威に従う

日時：2016年6月12日（朝拝）

クリスチャンと国家的為政者との関係について語られている有名な箇所です。ある人にとって、この世の政治に関することは私たちの信仰とは別次元のことではないかと思われるかもしれません。しかし私たちは12章以降で神への礼拝生活について見ています。1～11章までに語られた素晴らしい神の救いに心から感謝してどのように歩むことが神に喜ばれるあり方なのか。そういう流れの中で国家的為政者への関わり方についても述べられています。ですからこれも神への礼拝生活を構成する重要な一部と位置づけられていることが分かります。

まずパウロは1節で中心原理について語っています。「人はみな、上に立つ権威に従うべきです。」これは信仰を持って初めてこの箇所を読んだ人にとっては驚きのメッセージかもしれません。私たちはイエス・キリストを信じて天国の市民になったと教えられています。やがて神にさばかれ、過ぎ行くであろうこの世に属する者ではなく、今や永遠の天の御国に属する者であると。そういう私たちは神にこそ従いたいと思います。また神の国のリーダーになら従いたいと思います。ところがこの世の政治家や役人の多くは信仰者ではありません。そういうこの世の、価値観も全く違う人々に、どうして私たちが従うべきなのだろうか。本質的にそれは違うのではないか。そう思ってしまいがちです。しかしそうではないということをパウロは教えています。なぜ私たちはこの世の支配者に従うべきなのでしょう。

その答えが1節後半にあります。「神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。」ここに神の主権についての驚くべき真理が語られています。この世の人々はそのようには認めないでしょう。我々は神に従ってこのようにしているのではない。自分たちで考えてこうやっているのだと。しかし聖書はそういう人間の思いを超えて、神が政治的統治を定め、そのための人々も立てていると語ります。このことは神がこの世界を捨てていないということを意味します。神はこの世に無関心なのではなく、この世界に関心を持ち、この世界のために統治者を立てている。そしてその人々を用いて御心を実現していると言っています。少し前に見た9章17節に、エジプトの王パロをわたしが立てたという神の言葉が引用されていました。ある

いはダニエル書に出て来るネブカデネザル王、またペルシャのクロス王についても、神が彼らを立てたと記されています。あるいはイエス様の誕生の記事においてマリヤとヨセフが旧約聖書の預言通りベツレヘムへ向かったのは、皇帝アウグストの勅令によると聖書は記していますが、これも神が時のローマ皇帝さえも御心実現のために動かしておられたというメッセージを持っています。であるなら、これらの人々に対する私たちのあり方は定まってきます。それは神に従う私たちは神が立てたこれらの人々にも従うということです。私たちはただ人間の支配者ばかりを見るのではなく、その背後に神が立っていることを見て、神に従うように目の前に立てられた人に従うのです。その支配者に従わないことは何を意味するのでしょうか。それは2節にありますように「神の定めこそむく」ということです。その人は神ご自身に逆らっている。それゆえその人は自分の身にさばきを招くこととなります。やがて神にそのことでさばかれるのです。私たちはこのことを真剣にとらえて、この神のみこころに従うように努めなければならないということになります。

では神はこれらの政治的統治者を立てていることにどんな御心と目的を持っているのでしょうか。パウロは3節で「支配者を恐ろしいと思う必要はない」と語っています。私たちはこの世の権威者に、どちらかと言うと恐れを感じてしまいがちです。たとえば車を運転していて、思わぬところから警察官が出て来たらどうでしょう。まずハッとして次に恐怖を感じる。よく警察官は電柱の陰やトラックの陰に隠れて違反者を見つけようとしています。私などはそのような姿を見ると、ついバイクで走り回ってお世話になった時代を思い起こして敵対心を持ってしまう。しかしその人たちのしていることは悪なのでしょうか。思い起こすのは千葉で奉仕をしていた時代、中会の行事に出かけて車で帰る時のこと、助手席には長老さんが乗っていましたが、突然警官が目の前に現われて「ハイ、こっち、こっち！」と誘導され、陰に連れていかれました。私としては「え？スピードはそんなに出していないはずだけど」と思って窓を開け、堂々と胸を張って対応したところ、その胸にシートベルトをしていませんでした！それで取調べを受け、免許の点数も引かれ、罰金も痛かったのですが、一番きつかったのは「あなたの職業は何ですか」と聞かれたことでした。その頃は伝道師でしたが、自分の口から「教会の伝道師です」と説明し、警察官がニヤッとした時、自分はキリストの御名を汚す大変なことをしてしまったと大変申し訳なく、また恥ずかしく思ったことでした。しかしその取締りは良いことにつながりました。それ以来、私はシートベルトをしないで車を運転したことは一度もありません。助手席に座る人にも必ず着用をお願いします。こうすること

によって命がより守られることになり、安全に気を配るようになります。そういう意味で警察は良い働きをして下さったのではないのでしょうか。もし皆さんの家のベルがなってドアを開け、そこに警察官が立っていたらどうでしょうか。私たちは恐れるかもしれませんが。何か逮捕されるようなことをしたかと。しかしパウロは言っています。支配者を恐ろしいと思うのは悪を行なう時である。もし交通ルールをしっかり守って運転しているなら、警察官が突然出て来ても恐れる必要はありません。いつも正しく生きているなら、玄関の外に警察官が立っていても何ら恐れることはありません。むしろ善を行なっているなら、それらの人々は誉めてくれる。社会のために貢献したり、賞賛すべきことをすると、統治者が勲章をくれることがあります。ここにパウロはこの世の権威者が立てられている神の目的について語っています。それとは悪を罰し、善を奨励するというものです。社会の悪が増え広がらないように歯止めをかけ、抑制し、一方では善を誉めることによって、地上の秩序や治安を維持することです。これは人間の墮落に対してどうしても必要な制度です。私たちは罪のために自己中心です。もし様々な規制や統治がなかったら罪は溢れるように氾濫し、社会はメチャクチャになり、とても平穩に過ごせるどころではなくなるでしょう。東日本大震災が起こった時も、実家の石巻の商店街も水浸しになりましたが、残念ながらそれに乗じて店から金品を盗む犯罪が横行したそうです。先日の熊本地震でも避難して誰もいなくなった家に入って盗みを働く人のことがニュースで流れました。無法地帯ではそうなるのが人間の現実であるということです。捕まえる人がいなければ、皆勝手に自分のしたいことをする。ですからもし神が政治的統治者を立てることによって悪を抑制して下さらなかったら、この世界はどうなっていたことでしょうか。とても想像が付きません。とうの昔に世界は滅びていたということだけは断言できるでしょう。私たちはそのことを思う時、神が支配者を立てておられることを何と感謝すべきかが分かるのです。神はこの制度によってこの世が最悪の事態、地獄と化すことがないように支え、また外的な平和と安全を保っていて下さるのです。

またここで前回の箇所との関連で目を留めておきたいことがあります。それは悪の処罰の問題です。前回の12章19節で「自分で復讐してはならない。神の怒りに任せなさい。」と言われました。そして私たちとしては敵が餓えていたら食べさせ、渴いていたら飲ませなさいと言われました。しかしこのことは最後の審判の日まで、悪人はこの世で誰からもさばかれず、好き勝手にのさばることができるということなのではないでしょうか。そうではないことが今日の箇所から分かります。4節後半に「彼は無意味に剣を帯びて

はいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行う人には怒りをもって報います。」とあります。すなわち私たちは個人としては手を下すことは禁じられていますが、公的な政治的支配者はそうでないのです。政治的支配者の働きは、今日見て来ましたように、悪を抑制し、公共の平和を維持することです。ですから私たちはなされた悪がそのままのさばらないように、それによってその悪が益々社会に広がって害を与えないように、公的な権威に訴えてさばいてもらうことは良いことなのです。そのためにこそ、公的な権威者には剣の権能、悪に怒りを下す権能が与えられています。もちろんそうであっても、復讐心からそれをするのは聖書で禁じられています。私たちがそれをするのは、あくまで悪が正しくさばかれるためです。それによって社会の正義が保たれ、平和が維持されるためです。この区別をわきまえることによって、私たちは個人的に復讐するという神が禁じている罪から自分を守る必要があるのです。

さてパウロは最後に5節以降でまとめの言葉を述べています。まず5節に「ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。」とあります。「良心のためにも」とは、これが神のみこころに基づく制度であることを知っているからということです。ただ恐ろしいからではなく、これは神のみこころであると受け止める心で積極的に従うのです。そして6節に「同じ理由で」とありますが、これも今見た「良心のゆえに」ということです。誰でも税金を払うことはあまり嬉しく思いません。昔から人々はなぜこんなに払わなければならないかと文句を言って来ました。しかし私たちは、それをしないと罰されるからという恐れからだけではなく、神の恵み深いみこころを感謝し、その良心のゆえに払うべき税を払うのです。7節の「あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。」という部分は、ここでは私たちと関わりのある様々な支配者や権威者、役人を指しているのでしょう。また「みつぎ」「税」という言葉は、注解者によると「直接税」「間接税」を指しているとのこと。またただそれらの決まりを守るだけでなく、このために神によって立てられ、その働きをしている人々にもふさわしい恐れと敬いを表すように、とされています。

以上のローマ書13章1～7節。ある人はここを読んで、これではこの世の支配者があまりにも肯定的に描かれ過ぎていると言うかもしれません。ここにあるのは理想論であって、現実離れした机上の空論ではないかと。しかし私たちは、パウロがこれを書いた時代も決して世の中はクリスチャンに有利な世界ではなかったことを考えるべきです。非友好的なお役人、敵対心を持つ支配者たちもいました。その彼らによって迫害もされ

ました。そういう中でパウロはこのように書いたのです。もちろん彼は無制限にこの世の支配者に従いなさいと言っているのではありません。私たちがこの世の支配者に従うのは、彼らが神のしもべであると考えているからです。ですからその人々がもし神の御心に反することを要求してくるなら、私たちがその人たちは神のしもべになっていないと言わなければなりません。そして聖書にありますように「人に従うより、神に従うべきです。」と言わなければなりません。歴史の中でしばしば為政者はその国民に絶対的忠誠を要求しました。時にはクリスチャンに対し、ローマ書 13 章をわざわざ朗読して、だからあなたがたは我々に従いなさいと言った凶々しい役人もいました。しかし私たちは神に不服従なことまでして、為政者に従順であるようにとは言われていません。イエス様は「カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。」と言われました。「カイザルのものはカイザルに」という言葉で、私たちにこの世の為政者に対する義務があることをイエス様は明言されました。しかしその後「神のものは神に返しなさい。」とも言われました。すなわち私たちは先の言葉に注目するあまり、この後の言葉を軽んじてはならないのです。むしろ「神のものは神に返す」というより根本的な基本線、大原則の枠の中で、先の命令も考え、実践して行く必要があるのです。

そのことは押さえつつ、私たちは今日のローマ書 13 章に色々な条件や例外をくっつけて、ここにある明白なメッセージをあいまいなものにしないようにしなければなりません。誰が読んでも明らかに語られているメッセージがここにあるのに、色々な注釈を付けて結局はそれと反対のことを強調するメッセージにしてはならない。私たちがここから学ぶべきは政治的統治は神の御心によるということです。これに従うことは神の喜ぶところであって、神への礼拝となることです。ですから私たちはここに示されている神のみこころに沿う歩みへ進みたいと思います。私たち信仰者は神が立てている支配者たちにもっと感謝を現わすべきでしょう。1 テモテ 2 章 1 節に「王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。」とありますように、様々な権威者たちが主の目的にかなう良い働きをすることができるよう、感謝しつつ日々祈り、積極的に従うべきでしょう。しかしもちろん神以外のものに絶対的忠誠を誓うことは私たちにはあり得ません。私たちはすべてのことを福音の光のもとで判断します。そして神に第一に従う者として為政者を敬い、従いつつ、もし彼らが正しくその務めを果たしていない時にはそのことについて警告し、必要な時には抵抗さえも示して、神に喜ばれる礼拝の生活をささげていくべきなのです。